

7. 普通作品目の環境保全型農業技術

②大豆

慣行基準

総窒素施肥量	3kg/10a
節減対象農薬使用回数(成分回数)	16回

減農薬・減化学肥料栽培のポイント

1. 種子更新の徹底
紫斑病等の種子伝染性病害の予防と発芽揃いのため毎年更新する。
2. 排水の徹底
地下水位は30cm以下とし、根の伸長を促進する。
3. 土づくりの徹底
一般には有機物（堆肥）1t、苦土石灰100kgを施用する。
尚、地力の落ちている圃場は堆肥2t、ようりんを40kg追加。
4. 播種適期と栽植密度を適正にする。
平年は梅雨明け前が播種適期であり、播種を適期に行なうには圃場排水が重要。
5. 培土（土寄せ）作業を徹底する。
不定根の発生を促進し根域の拡大と倒伏防止に有効。また雑草害を予防する重要な作業である。不耕起栽培では機械能力の向上が不可避。
6. 病虫害防除を適期に行なう。
ハスモンヨトウ、カメムシの発生時期を把握し被害が拡大しない時期を見定める。

1. 減化学肥料栽培技術

[化学肥料1.5kg以内]

1)有機入り特別栽培肥料の使用

特裁大豆専用肥料（BB 特裁大豆専用窒素一燐酸一カリ：6-10-10；窒素の半量は有機質由来）を使用することで、化学肥料 3kg の半分にすることが可能。

2. 環境保全型病虫害防除技術

[8成分以内]

1) 耕種的防除

圃場排水性向上による雑草種子残留防止

2回培土による除草効果

2) 防除モデル（成分）

- | | | |
|----------|-------|---|
| ①種子消毒 | キヒゲン | 1 |
| ②除草剤撒布 | エコトップ | 2 |
| ③ハスモンヨトウ | | 1 |
| ④カメムシ紫斑病 | | 2 |
| ⑤カメムシ | | 1 |

3. 機械化体系

1)播種：筋播、点播

2)培土：管理機又はトラクター

3)防除：無人ヘリ又はブームスプレーヤー

4)収穫：コンバイン

5)調製：

収穫時期は完全落葉後 3~4 日放置し、茎をゆすると粒が莢内で音がするようになって実施する。

4. その他栽培上の留意点

3年以上の連作は、地力の低下を招き収量性が劣ることから避ける。